「私の家族～特別養子縁組・親と子の１５年～」を見て

養子縁組には、養子が実親との親子関係を存続したまま養親との親子関係をつくるという二重の親子関係となる「普通養子縁組」と、養子が戸籍上も実親との親子関係を断ち切り、養親が養子を実子と同じ扱いにする「特別養子縁組」とがある。

先日のドキュメンタリー番組「私の家族～特別養子縁組・親と子の１５年～」では、この１５年間に３人の子ども（養子）を育てているある一家と、１８年間で約２４０件の特別養子縁組の紹介・斡旋の実績のある NPO の活動が取材されていた。

この NPO の代表者は、法的には親子関係の切れる特別養子縁組でありながら、「隠し通せるならして欲しい。通せないでしょ。それだったら最初から云おうって。それは（子ども）本人に誠意を尽くすことであって、本人のルーツだから伝えて上げてって。」と、育ての親に対し産みの親の存在を子どもに隠さず伝えることを求め、子どもと実親（産みの母親）との交流の仲介さえしている。

この家族の子どもたちは養親である両親に恵まれながらも、長女（１２歳）は、「自分のお母さんがどんな人か……会いたいし…、不安なのかな～。なんでうちはここにいて、他の家は普通に側にいるのか…、不安になる時はある。けど、逆にみたら自分は一人しかいないお母さんが二人もいて幸せなのかなって見方もある。だから大丈夫なのかな～。色々…。」と、複雑な心境を語り、養母と話し合って産みの母との交流を模索している様子も取材されていた。

長男（１４歳）も、「なんで会いたいって聞かれても困っちゃうんだけど、会ってみたいんだよね、一回…。どういう人なのか、産んでくれたお母さんだから一度は会ってみたい、一度でいいから。おしゃべりなどしなくていいか…、一度だけ会ってみたい。」と、揺れ動く心境を語っていた。

養子となった子どもが実母を求める心境については、以前に記事「 番組『血をこえて…“わが子”になった君へ』を見て（HP「雑学 BN」のマスコミ等コメント関係（Ⅳ）、2008.07.21：参照.）で触れたことがあるが、やはり子どもは理屈ではなく自分の存在のルーツを知りたいと思うのは、人としての自然な感情だろうと思うだけに、この NPO の活動趣旨と、それを理解して子ども（養子）たちの心境を真摯に受け止め向かい合って支え続けるこの養夫婦に敬服すると共に、「家族って何だろう？」と改めて考えさせられる番組であった。

阿部幸泰　　（2010 年 5 月 11 日　記）